

主論文の要約

論文題目：罵倒語を中心としてみた日本文化における「男らしさ」の研究

—中東・地中海社会との比較から—

氏名：REZAEI Alireza (れざーい・ありれざー)

論文内容の要約：

言葉は個々の民族の精神文化を探るための重要な窓口となりうる。罵倒語も言葉の一部であるため、当然それを通じて、ある社会の潜在的構造や、社会感情の動態、また集団の欲求や価値観を探ることができる。罵倒語の共通点を相手に不快な考えを押し付けるとすれば、果たして私たちがどういう心理的背景に基づいてそれを放つのか、考えてみる価値はある。

罵倒語の内容となる素材、つまりタブーの対象となるものは、かなり幅広く、身体的特徴(肉体的欠陥)、性、排泄物、宗教などがあるが、本研究では、「性」を素材にした罵倒語(以下、性的罵倒語と称す)について考察を行う。

基本的に性的罵倒語は「性器」、「性道徳」、「性行為」にかかわる語彙・表現から構成されているが、本研究では、「性行為」を素材にした罵倒語に注目し、「なぜ日本語には中東や地中海の諸言語(例えば、アラビア語、トルコ語、ペルシャ語、イタリア語、スペイン語、フランス語等)のように、相手自身、あるいは相手の身内の女に対して「犯す」といった強引な性行為を示唆する用語を使った罵倒語が見当たらないのか」という問題を取り上げ、考察を行う。

事実、この問題には、中東・地中海と日本との性風土の相違が反映されている。第2章で具体的な事例を紹介するが、中東地域では、性的罵倒語で相手、あるいは相手の身内の女を罵ることは、場合によっては殺害される危険性を孕んでいる。また、2006年のワールドカップの決勝戦で起きたフランス代表ジダンの頭突きの問題も、まさに地中海において、性的罵倒語、特に身内の女が引き合いに出される罵倒語の恐ろしさを物語っている。

一方、第3章で考察するように、日本語では相手、あるいは相手の身内の女を引き合いに出す罵倒語が見当たらない。これは罵倒語が豊富に載っている『枕草子』、『東海道中膝栗毛』、『浮世風呂』などといった文学作品をみても確認できる。さらに、日本の民俗には、罵りそのものを目的として、公然と罵倒語の交換が行われる「悪口祭」という慣行があった。悪口祭における悪口雑言の慣習は、歴史的にも地理的・空間的にも奥行きと広がりをもつものであったが、しかしこれらの祭で用いられていた罵倒語をみても、「犯す」を素材にした強姦含意のある表現(罵倒語)が見当たらない。

一体なぜ中東や地中海の諸言語と対照的に、日本語の罵倒語では「性」に比重が置かれていないのだろうか。性とは実に重要で、歴史を動かす大きな一要素である。各民族の神話や古典、民俗、伝承文化、民間伝承などを性に限って比較検討すれば、いかに各民族の性の捉え方が異なるのかは浮かび上がってくるだろう。このため、性的罵倒語の形にも、個々の民族の性格・性意識が反映していると言っても決して過言ではない。

ところが、日本では性の問題が、学問のテーマとして真正面から取り上げられたことはほとんどなかった。民俗学でも、その問題にふれているように装いながら、実際には祖霊信仰や農耕儀礼などの問題にすりかえられてきた。確かに、日本人の性に関わる文化がどのように形成されたかを論及するのは並大抵のことではないが、日本人の性に対する意識、行為、表現、いってみれば日本人のセクシュアリティを、性的罵倒語を根底に分析することによって、日本の性風土のあり方をよりの確に捉えることができるであろうと筆者は考えている。

本研究では比較文化の視点から、これまで十分に検証されることが憚られていた日本の性風土を正面から取り上げ、考察を行う。注目すべきは、本研究は日本の性風土を、キリスト教、あるいはイスラム教の性道徳観を基準にして肯定・否定するのではなく、あくまでも言語人類学の観点から、日本語と地中海・中東諸言語における性的罵倒語の文化的・歴史的・宗教的背景を理解しようとする試みである。この意味で、本研究は「言葉」を通じての日本人論でもある。

なお、本研究の方法は、文献調査及び筆者の提示する概念・仮説に基づいている。

論究にあたって、まず第2章では、言葉と文化と罵倒語の関わり合いについて論じる。

第3章では、そもそも「性」を素材にした罵倒語をどのように分類すべきか、筆者の考えを提示した後、日本語における性的罵倒語のあり方と、なぜ日本語には強引な性交を素材にした罵倒語が見当たらないのかという疑問に対する従来の説を述べる。

事実、従来の説では、日本人の性に対するおおらかさが強調されている。しかし、筆者が日本人の性に対するおおらかさを認めつつも、おおらかさというのは、この疑問の直接的な原因とする説を早合点したものと考える。このため、筆者の説を述べるにあたって、第4章では、「ファルス」という概念を提示する。ここでいう「ファルス」は、古代信仰においては生産性の向上や開運を求めるための崇拜の対象となっていた人工的な男根形のことではなく、男の「犯す」能力・欲望を表す「(性的)攻撃性」、ひいては「犯される」ことを防ぐための「防御性」を象徴する概念である。

注目すべきは、ファルスの概念における「防御性」というのは、男自身が現実的にも象徴的にも受動的な立場に立つのを防ぐだけではなく、身内の女が、よその男の攻撃の対象になることを防ぐ能力も指す。すなわち、本研究でいうファルスの概念では、男がよその男と彼らの身内の女を攻撃すると同時に、自分、あるいは身内の女をよその男の攻撃から守ることで、男らしいと称えられるわけである。この文脈でいう攻撃とは、暴力を振るったり、あるいは対象を実際に強姦したりというハードな意味合いでの攻撃ではなく、むしろ隠微な視線や卑猥な投げ言葉、つまり、強姦願望といったソフトな意味合いでの攻撃のことをあらわす。

そしてこの概念に基づいて、強引な性交を示唆する「犯す」という用語が用いられている罵倒語においては、「誰」が犯される「対象」となり、その対象が犯されることによって、「何」が疑問視されるかについて検証を行う。

ファルスの概念は、男同士の性的関係にならって、男が「犯す」側であるか、それとも「犯される」側であるか、という対立関係に基づいて成り立っているゆえに、「犯す」をモチーフにした性的罵倒語の背景を理解するには、これらの罵倒語が使われる地域における「男

色」の捉え方も検証しなければならない。したがって、第4章では、中東及び地中海地域の主たる宗教であるイスラム教とキリスト教における男色の捉え方について考察を行い、「犯す」をモチーフにした性的罵倒語では、いかに男色、ひいては「男らしさ」に対する捉え方が反映されているかを明らかにする。

第5章では、中東社会を事例に、筆者の提示する「ファルス」の概念が、いかに男女関係にあらわれているかをみてる。この章では、中東社会特有の現象とも言える「ゲイラト」という概念も提示し、これらの概念における「男らしさ」の問題に注目する。事実、ファルスとゲイラトの概念を理解してはじめて、「犯す」をモチーフにした罵倒語の心理的背景が明らかとなる。

一方、第6章では、果たして日本の性風土においても、男の「犯す」能力・欲望を表す「(性的)攻撃性」、ひいては「犯される」ことを防ぐための「防御性」を象徴するファルスという概念が当てはまるかどうかについて考察を行う。このため、まず日本文化における男色の捉え方を検証した後、地中海や中東地域のように、日本文化においても身内の女の保護・管理は男らしさの欠かせない要素であるか否かについて論じる。

第7章では、キリスト教・イスラム教文化圏における「性」の捉え方について考察を行い、これらの社会では、いかに性・性行為は「権力」のメタファーで捉えられてきたかについて論じる。この章では、キリスト教とイスラム教における性の捉え方には、どのような共通点、あるいはどのような相違点がみられるかも明らかとなる。平たく言えば、キリスト教では、性が根本から否定されるゆえに、性には「権力」の面しか存在しないのに対して、イスラム教では、性そのものが否定されることはないため、権力の面だけではなく、「快樂」の面も存在する。しかし、男女両性ではなく、男のみがこの快樂を享受できるとされるゆえ、結局、イスラム教においても、キリスト教と同様に、性は権力のメタファーで捉えられることになる。

他方、第8章では、日本における性の捉え方を考察し、キリスト教・イスラム教文化圏と対照的に、古代から現代に至るまでの日本文化においては性はいかに「快樂」という意味合いで解釈されてきたかについて論じる。確かに、日本文化における性の捉え方にも権力の面が存在していたが、それは上層社会といういわゆるマイノリティーの捉え方にすぎなかった。これに対して、マジョリティである下層社会に属する日本人は、歴史の長い年月の間、古代からの性意識を保持し、性の自由を謳歌してきたのである。

最後に第9章では、第3章～第8章で考察したことをもとに、「なぜ日本語には中東や地中海の諸言語のように、相手自身、あるいは相手の身内の女性に対して「犯す」ということを示唆する罵倒語が見当たらないのか」という本研究の疑問に対する筆者の説を述べる。この説によると、日本文化では性・性行為を権力・支配のメタファーで捉える傾向が弱いため、ファルスは男らしさの指標になりにくく、ひいては、日本語には「犯す」をモチーフにした性的罵倒語が見当たらないのも、日本文化においては、「自分が「犯す」側である」ということを主張することは、必ずしも男らしさの表れにはならないからである。むろん、この説における「ファルス」は、本研究で提示されたファルスの概念、つまり男の「攻撃力」且つ「防御力」を象徴するものである。